

2022 全道合研 第1分科会「国語教育」 報告

11/12 (土) 13:00～17:00 Zoom によるオンライン開催 参加者 10 名

*全国教研参加報告

8月の高知での全国教研に参加された2名の先生より報告あり。戸川氏の「北海道の先住民族であるアイヌ民族の物語をもとにした高等学校段階における創作活動」は、参加者に好感を持って受け止められただけでなく、教科書出版会社からも、とりわけ高校国語改悪学習指導要領による「言語文化」の教材としてアイヌや琉球の文学を学ばせたいという思いを具現化するきっかけとして、問い合わせがあったという。荒木氏からは全体会における、過度のICT化による「ティーチャーレス授業」の弊害が深刻な問題となっていることが報告された。

*報告されたレポートは以下の8本である。

(1)表現の喜びを感じ、書くことを楽しく豊かに

齋藤鉄也 (全釧路教職員組合)

全校生徒9人という小規模校で、1, 2年の複式学級の担任を持つ齋藤氏が、「〇〇スタンダード」や官製研修の荒波を乗り越え、学校生活を文章に書き綴ることで、児童に楽しく表現の喜びを感得させようとする。したがって、文章に「ダメ出し」をして添削指導するのではなく、たとえ稚拙な表現であってもその行間から生徒のあふれる思いを読み取って生徒の表現に共感していく。作文指導の主眼は「子どもの書いたものを(教師も生徒も)いかに豊かによむか、である」とする齋藤氏の指導からは、生徒が書く喜びをひとつひとつ身につけていく過程が、生徒の生活作文から、しかと見てとることができる。教科書の指導だけでは、感動に立脚した、生き生きとした文章は生まれ得ない。さまざまな生活体験を用意し、感動する場面を作り出す齋藤氏の指導が、参加者の共感を呼んだ。

(2)入門期の指導 わかる! できる! たのしい! ~てなんごひとつ~ 市来健 (檜山教職員組合)

「作文を学級経営の中心に据える」という大胆な思いを、市来氏は学級通信などを通じ具現化していく。子どもたちのおしゃべりを文章として学級通信「てなんご」に掲載していく。市来氏の学級通信には、写真による子どもたちの豊かな表情とともに、子どもたちが豊かに生活を書き綴った文章が満載。文章は「手直し」ではなく「付け足す」指導。改悪学習指導要領が意図するような実学に矮小化された国語とは正反対の方向の指導で、子どもたちの豊かな心がはぐくまれているのが手に取るようにわかる。市来氏は「この学級通信があれば、特別な道徳の指導などいらない」というが、まさにその通りである。今年で定年を迎えるとは思えない、市来氏のパワフルな実践に、参加者一同ただただ脱帽。

(3)お笑いをやってみよう

落合良子 (上富良野高等学校)

2年生の選択科目「国語表現」で漫才の創作実演に取り組む。中学時代に不登校を経験した生徒たちが、漫才を通し、自分や他者の新たな可能性に気づき、いきいきと授業に取り組む過程が報告された。「起立、礼」そのあと「着席」ではボケにならない。どうボケるか、という基本的なところからスタートし、聞き手の想定を裏切るずらし方を、生徒は自分たちで体得していく。それまで目立たなかった生徒が、この漫才の発表で他の生徒の高評価を得たことにより、他者の前で堂々と自分を表現できるという才能を開花させ、ついには生徒会役員に立候補して活躍、という思わぬ収穫もあった。実際に生徒の演じた漫才を見ることもできたが、きわめて上質の笑いを提供できていることに、参加者一同感嘆。

(4)言語活動としての「民主主義」 評論『政治の基本は民主主義』をめぐって

大澤信哉 (南幌高等学校)

18歳成人となり、高校生でも選挙権を持つ生徒がいるようになった。山口二郎の評論『政治の基本は民主主義』を教材に、評論の読解に主権者教育をからめるという視点で授業を展開。世界全体で見れば

民主主義は決して「あたりまえ」のものではないなど、生徒の「常識」「思い込み」にゆさぶりをかけていく。模擬投票やポートマッチなどにも踏み込んでいく。全校生徒わずか6名という小規模校のメリットを最大限に生かした、密度の濃い授業を展開する大澤氏の手法に皆感嘆しきり。生徒の反応も極めてよかったという。討議においては、授業において政治の話題にどこまで踏み込めるかについて、意見交換がなされた。「形ばかり」の民主主義と、ほんものの民主主義を見分ける力が必要との見解で一致。

(5)「日本語表現」指導について

東谷一彦（札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科）

特任教授として、2022年度から短大だけでなく、4年制大学の方でも講座を担当するようになった東谷氏の「日本語表現」に関わる講座の生々しい実態の報告。学生の65%がほとんど読書せず、72%が新聞を全く読まない、という実態の中で、敬語法から手紙の書き方などを、学生の実態に応じ指導していく。「保育園落ちた、日本死ね」という数年前のあまりにも有名なSNS上の書き込みを「きちんとした日本語にする」という課題を学生に提示し取り組ませているのだが、この書き込みが生まれた背景などを的確に説明していく。この「言葉の背景にあるもの」の把握なくして、先の課題に取り組みせることは意味がない。東谷氏の苦闘の中から、私たちが学ぶべきものは非常に数多いと、一同共感。

(6)ウクライナ民話「てぶくろ」を読んで、平和について考える

齋藤鉄也（全釧路教職員組合）

2022年2月から延々と続く、ロシアとウクライナの戦争を、何とか教室で話題にできないか。管理職から「戦争を話題にするな」などの圧力がかかる中、ウクライナ民話の「てぶくろ」を教材として取り上げた貴重な実践報告。落とし物の手袋に次々にさまざまな動物たちがやってくるが、誰一人として断らず、仲間として迎え入れる。最後に手袋の落とし主のおじいさんが現れると、皆この手袋の家から一斉に去っていくというストーリーは極めて寓意に富む。文学作品を通じて、平和の問題にどう触れるか——一方的な「ロシアが悪い」だけでは子どもの真実を見抜く目は育たない。その背景にあるもの、歴史や文化、人々の考え方を、文学を通じ学ぶことの重要性を、参加者の議論を通じ確認できた。

(7)Facebookでのつながりを活用し、日本語で世界と教室をつなぐ実践の可能性

戸川貴之（帯広柏葉高等学校）

FacebookというSNSを通じ、「国際交流は英語でするもの」という従来の通念を打破し、諸外国（とりわけアジア）の人たちと、日本語で国語授業の学びを交流し「互いの母語で世界の日本語話者とつながる」ことを目指したという、きわめて意欲的な実践。わかりやすい日本語で相手に伝える、という実践の場にもなる、という。安部公房の『赤い繭』をミャンマーの学生とともに互いのよみを交流すると、『赤』は共産主義のことかなどと、思いもよらぬよみが飛び出す。戸川氏は受験勉強に縛られる進学校の生徒に、3年生だからこそ自分たちの学びを確認し、発信、交流する場を持ってほしい、と言う。旧来の狭い価値観を打破し、あえて国語で既知の知識を新しい世界の人々とつながる場を提供するという意欲的な実践に、参加者一同感嘆しきり。今後の国語授業の方向性も示していると言えよう。

(8)池田流「授業開き」と「最後の授業」

池田和彦（深川西高等学校）

「天動説」のごとき学校文法⇔橋本「インチキ」文法を徹底して拒絶し、ほんものの文法指導とそれに基づく科学的な国語教育の重要性を訴え続けてきた報告者は、国語教育を通じ「真実を見抜く目を養う」とことと、「真実を貫き通す」ことの大切さを、その「授業開き」と「最後の授業」を通じ生徒に伝えていく。欺瞞を見抜く目の大切さを訴え、現代文の最後の授業では、ソ連の反体制詩人エフトゥシェンコの「出世」をとりあげる。「わたしは 出世を しないことを／じぶんの 出世と するのだ」という最後の2行に結晶するエフトゥシェンコならびに報告者の信念を、高校を単立つ若者がどれだけ共感できるか。この詩に感動した、と言ってくれる生徒は数多いが、それを自分の生き方の信念にできる生徒であってほしい。

（文責：池田和彦）